

時代小説ベスト・セリウム・コン

5

講談社

捕物帳小説集

八百八町 の 名探偵



時代小説ベストセリング



八百八町の名探偵

捕物帳小説集

時代小説ベスト・セレクション 第五巻

八百八町の名探偵 捕物帳小説集

一九九四年八月二三日 第一刷発行

著者 岡本綺堂 他

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

郵便番号 一一二一〇一

東京都文京区音羽二一二二一

電話 編集部(〇三)五三九五―三五〇五

販売部(〇三)五三九五―三六二二

製作部(〇三)五三九五―三六一五

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価はカバーに表示してあります。



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部にてお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部にてお願いいたします。本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

©Kodo Nomura and others 1994.

Printed in Japan

ISBN 4-06-254905-0 (文2)

八百八町の名探偵 ◆ 目次

春の雪解〔半七捕物帳〕

岡本綺堂 8

迷子札〔銭形平次捕物控〕

野村胡堂 34

佐七の青春〔人形佐七捕物帳〕

横溝正史 60

十六剣通し〔若さま侍捕物手帖〕

城昌幸 84

両国の大鯨〔顎十郎捕物帳〕

久生十蘭 116

小梅富士〔なめくじ長屋捕物さわぎ〕

都筑道夫 140

魔性〔ゆっくり雨太郎捕物控〕

多岐川恭

174

白浪看板〔にっぽん怪盗伝〕

池波正太郎

190

又右衛門の女房〔はやぶさ新八御用帳〕平岩弓枝

216

編者解説

縄田一男

240

装画 村上 豊

装丁 熊谷博人

八百八町の名探偵

〔捕物帳小説集〕

岡本綺堂

春の雪解ゆきどけ
〔平七捕物帳〕

「あなたはお芝居が好きだから、河内山こうちやまの狂言を御存知でしょう。三千歳みちとせの花魁おいらんが入谷いりやの寮へ出養生じようしやうをしていると、そこへ直侍なおぎわらいが忍んで来る。

あの清元げだんの外題げだいはなんと云いましたっけね。そう、忍逢春雪解しのびあはるのゆきとけ。わたくしはあの狂言きやうげんを看るたんびに、いつも思い出すことがあるんですよ」と、半七老人はつづけて話した。「勿論お話の筋すべ道はまるで違いますがね。舞台は同じ入谷田圃いりやたんぼで、春の雪のちらちら降る夕方に、松助の丈賀じやうがのような按摩あんまが頭巾をかぶって出て来る、その場面

の趣があの狂言にそっくりなんですよ。まあ、聴いてください。わたくしの方は素話すばなしで、浜町はまちょうの太夫さんの粹いきな喉を聴かせるなんていうわけには行かないんですから、お話つやに艶つやはありませんがね」

慶応元年の正月の末であつた。神田から下谷したやの竜泉寺りゆうせんじ前まで用達ようたしに行つた半七は、七ツ半午後五時頃ころに先方の家を出ると、帰り路はもう薄暗くなつていた。春といつても此の頃の日はまだ短いのに、きようは朝から空の色が鼠に染まつて、今にも白い物がこぼれ落ちそうな暗い寒い影に掩おほわれているので、取り分けて夕暮が早く迫つて来たように思われた。先方でも傘を貸してやろうと云つてくれたが、家うちへ帰るまで位はどうにか持ちこたえるだろうと断わつて、半七はふところ手でそこを出ると、入谷田圃へさしかかる頃には、鶴の羽をむしつたような白い影がもう眼先へちらつ

いて来たので、半七は手拭を出して頬かむりをして、田圃を吹きぬける寒い風のなかを突っ切って歩いた。

「ちよいと、徳寿さん。おまえさんも強情だね。」

まあ、ちよいと来ておくれと云うに……」

女の声が耳にはいったので、半七はふと見かえると、どこかの寮らしい風雅な構えの門の前で、年頃は二十五六の仲働きらしい小粋な女が、一人の按摩の袂をつかんで曳き戻そうとしているのであった。

「お時さん。いけませんよ。きょうはこれから廓にお約束があるんですから、まあ堪忍しておくんないよ」と、按摩は逃げるように振り切って行くこうとするのを、お時という女はまた曳き戻した。

「それじゃああたしが困るんだからさ。按摩さん

はほかにも大勢あるけれども、花魁はお前さんが御鼻肩で、ほかの人じゃあいけないと云うんだから、素直に来てくれないと、あたしが全く困るんだよ」

「御鼻肩にして下さるのはまことにありがたいことで、いつもお礼を申しているのでございますが、きょうは何分にも前々からのお約束がありますので……」

「嘘をおつきよ、お前さんは此の頃毎日そんなことを云っているんだもの。花魁だってあたしだって本当に思うかね。ぐずぐず云ってないで早く来ておくれよ。焦れたい人だねえ」

「でも、いけませんよ。まったくきょうばかりは堪忍して下さい」

どっちもなかなか強情で、容易に埒が明きそうにもなかった。しかし格別に面白そうな事件でも

ないので、半七は好い加減に聞き流して通り過ぎた。雪は景色ばかりで、家へ帰りつく頃には歇んでしまったが、それから陰った日が二日ほどつづいた。三日目に半七はふたたび竜泉寺前へ行かなければならない用事が出来た。

「きょうこそはあぶねえ」

かれは雨傘を用意してゆくと、大きい雪が果たして落ちて来た。帰りはやはり七ツ過ぎになって、入谷の田圃はもう真っ白に埋められていた。重い傘をかたげて、このあいだの寮の前まで来ると、日和下駄の前鼻緒があいにく切れた。半七は舌打ちをしながら堀ぎわに身を寄せて、間にあわせにつくろっていると、雪を踏む下駄の音がきこえて、門の中からこの間の女が飛石伝いに出て来た。

「まあ、いつの間にか積ったこと」

独り言を云いながら、彼女は人待ち顔にたたずんでいたが、傘を持っていない彼女は髪を打つ雪に堪えないと見えて、やがて内へ引っ返してしまつた。

手が亀縮んでいるので、鼻緒を立てるのに暇がかかつて、半七はようように下駄を突っかけて、泥だらけの手を雪で揉んでいるところへ、このあいだの按摩が馴れた足取りですたすた歩いて来た。その下駄の音を聞き付けたとみえて、女は待ち兼ねたように内からぬけ出して来た。前に懲りたのであろう。今度は傘をすばめて差していた。

「徳寿さん。きょうは逃がさないよ」

呼びかけられて、按摩はおびえたように立ち停まつたが、きょうも何か頻りに云い訳して摺り抜けて行こうとするのを女はまた曳き戻した。こうした捌着がたびたび続くので、半七も少しおかし

く思つて、もうつくろつてしまつた泥下駄を再び
いじくるような風をして横眼でそつと窺^{うかが}つてい
ると、按摩はあくまでも強情に振り切つて、きよう
も逃げるように此処を立ち去つてしまつた。

「ほんとうにしようのない人だねえ」

口小言を云いながら女は内へ引つ込んだ。その
うしろ姿の消えるのを見送つて、半七はもう五、
六間ゆき過ぎてゐる按摩の傘の白い影を追つた。
彼はうしろから声をかけた。

「おい、按摩さん。徳寿さん」

「はい、はい」

聞き慣れない声に按摩は少し首をかしげて立ち
停まると、半七は傘をならべて立つた。

「徳寿さん。寒いね。べらぼうに降るじゃあねえ
か。おまえにやあ廓^{なか}で二、三度厄介になつたこと
があつたつけ。それ、このあいだも近江屋の二階

でよ」

「はあ、左様でございましたか。年を取りま
す、だんだんに勘がわるくなりまして、御鼻^{ごひいき}肩
様に毎々失礼をいたして相済みません。旦那もこれ
から廓へお出かけでございますか。こういう晩に
お通いもまたお楽しみなものでございます。わが
物と思えば軽し傘の雪とか申しましてね。ははは
はは」

こつちの出鱈^{でたらめ}目を知つてゐるのか、知らないの
か、徳寿は如才^{じよさい}なく調子をあわせた。

「なにしろ悪く寒いね」

「この二、三日は冴え返りました」

「これから田圃を突つ切るのは楽じゃあねえ。ど
うだい、あすこで蕎麦^{そば}の一杯も啜^{すす}り込んで威勢を
つけて行こうじゃあねえか。おまえも附き合わねえ
か。廓へはゐるのはまだちつと早かろう」

「はい、はい、どうも御馳走さまでございます。

わたくしは下戸でございませうけれど、御酒を召しあがるお方は一杯あがらなければ、この田圃はちつと骨が折れます。はい、はい、ありがとうございます。」

一町ばかりを引返して、半七は小さな蕎麦屋の暖簾をくぐると、徳寿は頭巾の雪をはたきながら、古びた角火鉢へ寒そうに咬り付いた。半七は種物と酒を一本あつらえた。

「これはあらでございませうね。江戸前の種物はこれに限ります。海苔の匂いも悪くございませうね」と、徳寿は顔じゅうを口にして、蕎麦のあたかい匂いを嬉しそうに嗅いでいた。

蕎麦屋の女房は門の行燈に灯を入れると、その薄暗い灯かげに照らされて、花びらのような大きい雪が重そうにぼたぼた落ちているのが暖簾越し

に見えた。一本の酒をやがて半分ほど飲んだ頃に、半七は話し出した。

「徳寿さん。おまえが今あすこで立ち話をしていたのは何処の寮だえ」

「旦那はあの辺においでなさいましたか。ちつとも存じません。ははは。いえ、あすこは廓の辰伊勢という家の寮でございませう」

「先方じゃあ頻りに呼び込もうとするのを、おまえは無暗に逃げていたじゃあねえか。廓の寮ならば好いお得意様だ」

「ところが、旦那。どうもあすこは工合が悪いんでしてね。いえ、別に代をくれないの何のという訳じゃないんですが、なんですかこう、気味の悪いような家でしてね」

半七は飲みかけた猪口をおいた。

「気味の悪い家……。そりゃあどういふんだね。」

まさかに化けものが出る訳でもあるめえ」

「へえ、別にそんな噂もないんですが、わたくしはどうも気味が悪うございまして……。あすこで呼ばれると何だかぞつとして、逃げるように断わつて来るんですよ」と、徳寿は鼻の頭の汗を手の甲で拭きながら云った。

「変な話だね」と、半七は笑った。「どういうわけで気味が悪いんだろう。判らねえな」

「わたくしにも判りません。ただ何となしに襟もとから水を浴びせられたように、からだ中がぞつとするんです。眼が見えませんかなんにも判りませんけど、なにかこう、おかしなものが傍にでも坐っているような工合で……。まったく変でございますよ」

「一体あの寮には誰が来ているんだね」

「誰袖たがそでさんという花魁でございます。二十一二の

勤め盛りで、凄いいような美しい女だそうでございですが、去年の霜月頃しもづきから用事をつけて、あの寮へ出養生に來ているんでございますよ」

「暮から春へかけて店を引いているようじゃあ、よっぽど悪いんだろうね」

それ程でもないらしいと徳寿は云った。勿論、盲人の彼には詳しい様子もわからないが、いわゆるぶらぶら病いで寝たり起きたりしているらしいとの事であつた。それにしても、その辰伊勢の寮がなぜそれほどに気味が悪いというのか、その仔細が半七には判らなかつた。徳寿がもうたくさんだと辞退するのを、無理に蕎麦の代りを取らせ、かれは酒を飲みながらおもむろにその仔細を訊き出そうとした。

「それが何と云つて、お話のしようもないんですよ」と、徳寿は顔をしかめてささやいた。

「まあ、旦那。聞いてください。わたくしが奥へ通されて、花魁の肩を揉んでいますと……大抵いつも夜か夕方ですが……花魁のそばに何か来て坐っているような工合で……。いいえ、それが新造しんぞうと

衆や女中達じゃありません。そんな人達ならば何とか口を利くでしょうが、初めから終しまいまで一度も口を利いたこともないので、座敷のうちは氣味の悪いほどにしんとしてゐるんです。まあ、早く云えば、幽霊でも出て来て、黙っているんじゃないかと思われるようで……。わたくしは身体がぞつとして、どうにもこうにも我慢が出来ないんです。ございます。それですから、仲働きのお時さんには氣の毒ですけれども、この頃は無理に振り放して逃げてくるので……。いえ、もう、一軒のお得意ぐらいはしくじつても仕方がございません」

なんだか理窟があるような、理窟がないよう

な、一種奇怪な物語をこの盲人から聞かされて、半七も黙ってかんがえていた。日が暮れても雪はまだ降りやまならしく、白い花びらが暖簾をくぐって薄暗い土間へときどき舞い込んで来た。

二

もとより盲の云うことで、別に取り留めた証拠もないのであるが、半七はそれを一種の不思議な話として、ただ聞き流してしまふわけには行かなかった。彼はあくまでその不思議の正体を突き止めたかった。その晩は徳寿に別れて、神田の家へまっすぐ帰ったが、あくる朝、浅草の馬道うまみちにいる子分の庄太を呼びにやった。

「おい、庄太。廓は田町たまちの重兵衛の縄張りだが、おれが少しちよつかいを出して見たいことがあるんだ。てめえ一つ働いてくれ。江戸町ちようちうに辰伊勢と